

オリエンタル・トライアングル

入野 れん

一九八八年七月、パリ。エトワール広場をシャ
ンゼリゼ通りと逆方向に二〇〇メートルほど行
ったポルト・マイヨーに、E F F O（世界連邦設
立機構）本部があった。

「気に入らん。今どき、イラン行きを依頼する
なんぞ、デクエヤル国連事務総長はおまえを何だ
と思ってるんだ」

「あやしげな情報^{エイジエント}作業員だろ」

E F F O本部最上階で最高責任者のクリスト
フ・デルフィートは、四つ歳下の部下兼同僚を見
降ろした。E F F O情報部長を務めるルディ
ア・ライツは、来年で三〇歳になるとはとも見
えない童顔でくすくす笑っていた。

「怒鳴ってもムダだよ、デルフィート。アポも
取ったし、行かないわけにはいかない」

「アポ？ 無計画さで任務遂行を図るおまえ
が？」

ルディアンはボスの皮肉に取り合わず、言い添
えた。

「一応、国連パスポートを持っていくから、そ
れほど危険はないと思う」

「それほど？」

「デルフィート、僕が引き受けたことなんだか
ら、そんなに君が怒らなくても」

やや長めの黒髪をかきあげながら、ルディアン
が言った。きゃしゃな身体つきと童顔のせいで、
スーツ姿でなければ女性に間違われそうな外見
である。

「自分で引き受けたと言う以上は、行方不明に
なつて情報部を機能マヒに陥らせたりするなよ」

デルフィートは、フランスの気鋭の若手政治家
として議会で論戦するときとは、まったく違う面
持ちで強調した。情報部長とやりあう時には、あ

からさまに感情が出る。

「連絡が取れなくて音信不通になっただけじゃ
ないか」

「それが行方不明とどう違うんだ！」

E F F O名物プレジデント・デルフィートと情
報部長の掛け合いは佳境に入ろうとしていた。

「あの、情報部長……そろそろ飛行機の時間が
……」

ルディアンの中東行きに同行する情報部員、サ
イドがおそろのおそろ口を出した。

「と、いうわけだ。行ってくる」

「ルディアン！」

情報部長はさつと身をひるがえすと、サイド
の背中を押して部屋を出て行った。残されたデル
フィートはドアを見て息を吐いた。そしてデスク
の上の受話器をとって、秘書を呼びだした。

「エリザベートか？ デュマ外相との面会は十
時からだったな。その後でソ連大使館へ行くから、
スケジュールを調整しておいてくれ」

ルディアンが身体を張って現地に行く以上、デ
ルフィートも腰を据えざるをえなかった。

一九八〇年九月、イラク軍の国境侵攻によって
始まったイラン・イラク戦争はずると長びき、
戦争終結に気乗りしない超大国と、利益に群がる
金の亡者らのせいもあって、戦闘は八年もの間続
いていた。しかしその戦争もここにきてようやく、
軍事的敗北などから今まで停戦を強硬に拒んで
いたイランに態度変更に兆しが見えはじめてい
た。

国際連合の改変による世界政府樹立を目指す
E F F Oとしても、紛争解決は最優先事項だった。
デルフィートは煙草を取りだすと火を付けた。
しばらくの間は、停戦に向け、各国首脳に協力を
要請する仕事に精力を傾けることになりそうだ
った。

☆ ☆ ☆

「情報部長、あの……」

テヘランへ向かう飛行機のなかで、サイドは

ルディアンに話しかけた。

「我々の二つ後ろの席の男……シャルル・ドゴール空港からずつつけているように思えるのですが……」

ルディアンはちらつとその男を見ると、すぐ書類に視線を落とした。

「気にするな。放っておけ」

ルディアンはそう言ったが、サイドは気になつた。男は長身で、がっちりした身体つきだった。外見はゲルマン系ヨーロッパ人かと思わせるが、日に焼けた膚と精悍な顔立ちはどことなく、アラブ人らしくもあつた。髪は日にさらされた薄茶、目も薄茶だったが——眼光の鋭さにはただならぬものがある。

サイドの心配にもかかわらず、二人を乗せた飛行機は予定通りにテヘラン空港に着いた。二人が入国のチェックを全部終わり、外へ出ようとしたときだった。

「ルディアン・ライツ特使？」

ペルシヤなまりの英語だった。

「君たちは？」

ルディアンが言うか言わないかの間に、二人は背中にびたりと銃口を向けられていた。

「な、私たちを誰だと」

思わずサイドが振り向いて言いかけた。

「やめろ、サイド。抵抗するな」

ルディアンが制した。賊は六人。いずれもイラン人で髭を生やしている。賊は二人を人気のない駐車場へと連れ出し、そこにまたせてあつた大型四輪駆動車に乗り込もうとした。車に乗り込もうとして銃口が背中からはなれた一瞬、ルディアンは反撃に出た。虚をつかれた賊は、躊躇する間に^{あばら}肋を折られて転がっていた。サイドが一人を相手する間に、ルディアンは五人を倒していた。

全員倒した、と思ったとき、

「手を上げな！」

七人目の男の鋭い声が背後に響いた。男は車のトランクから身を乗り出し、ルディアンの後頭部にびたりと狙いを付けていた。

「へっ、随分な国連特使もいたもんだぜ。てめえらさらうだけのつもりだったが、こうなりや覚悟しろよ」

色黒の、かぎ鼻のイラン人だった。サイドはルディアンが撃たれると思つた瞬間、銃声が鳴り響いた。

「乗れ！ ルディアン！」

かぎ鼻のイラン人は撃たれた右手をおさえて地面にうずくまっていた。車の運転席に、飛行機の中で二人をつけていた男が銃を片手に合図している。ルディアンとサイドは車に飛び乗った。

「殺すな、エッケーレン！」

片手でハンドルを握りながら、もう一方の手で地面にうずくまるイラン人を撃とうとした男に、ルディアンは叫んだ。イラン人は、左手で銃を拾うと走り出した車に狙いをつけていた。叫ぶのは一瞬遅かった。銃声。イラン人は胸を朱に染めて倒れた。

車はかまわずその場を走り去る。イラン人が見えなくなった頃、エッケーレンと呼ばれた男が口を開いた。

「行先は？ シクレタリー・ルディアン・ライツ」

「国会議長公邸——車が見えないよう少し離れたところで降ろしてくれ」

「了解」

三人ともそれ以上何も話さないままで、目的地についた。そのまま挨拶して降りようとするルディアンの腕をエッケーレンが掴んだ。

「感謝のしるしは？」

「今度、会ったときに」

ルディアンはそっけなく言うと、手を振りはい車を降りて、下院議院横の議長公邸にまっすぐ向かった。

☆ ☆ ☆

「ソ連も承知しました。二日後にはウロンツォフ第一外務次官がイラクに停戦の説得へ行くこ

とになっています」

三〇分後、ルディアンはイラン国会議長ハシェミ・ラフサンジャニと会談を始めていた。

「……アメリカは？」

ラフサンジャニ国会議長は、肉づきのいい顔に皺をうかべて聞いた。

「少なくとも停戦の妨害はしません。大統領選挙が始まったことですし、この半年は選挙民受けしないことは極力避けるでしょう」

ルディアン・ライツは国連の特使としてというより、本業の政治・軍事情勢分析を専門とするヨーロッパのビジネスマンとしての本領を發揮し出していた。

デクエヤル事務総長が国連NGO（非政府国際組織）の一つ、E F F Oからルディアン・ライツをこの役に抜擢したのも、この方面の能力と実績を買ったことである。

「……本当にアメリカは、妨害しないだろうか」
ラフサンジャニは、不安げに問うた。

八年に及ぶ戦争で、イラン国民は疲弊しきつていた。イラク軍の侵入による会戦、化学兵器の使用にもかかわらず、国際世論はイランの味方とは言えなかった。

そして十日前に米軍イージス艦によってイラン旅客機が撃墜される事態に至っても、世界はイランに冷たかった。イランは、侵攻してきたイラクのフセイン政権打倒を目してきたが、それも困難なことは明らかだった。もはや戦争継続の意味は見出せず、イラン首脳部は密かに停戦の決意を固め、国連に知らせてきたのである。

「ある意味で、イランにとってチャンスです。アメリカは例の民間機撃墜でイランに負い目をもっていますから、イランが柔軟な態度を示せば、これまでのように強硬には出にくいでしょう」

「あの事件では……なぜ、世界はアメリカを非難しないのだろうか。大韓航空機がソ連に撃墜されたときはあれほど騒いだのに……」

ラフサンジャニ議長は、やや疲れた面持ちで言った。

「一つは、今回の事件が交戦区域で起こったこ

と、アメリカは誤認を認め、ソ連と違って謝罪³したこと、そしてアメリカのメディアに対する力。さらに、イランの孤立政策のツケ……言ってみれば、アメリカは事後処理としてやるべきことはいたいした、と世界は見たのです。もつと正確に言えば、西側のマスメディアは」

「やるべきこと？ 故意に撃墜したのにな？」

「イラン側がそう受け取る気持ちはわかりますが、イラン以外の国は、あれを誤認という認識でほぼ一致しているのです」

実際に誤認だったと言わないところが狡猾だと通訳しながらサイドは思った。ラフサンジャニ国会議長がそう思いこんでいる以上、誤認であるとルディアンが主張したところで、相手の不信を買うだけなのだ。それよりわかっていないのは他の連中で、自分は理解している、という立場を取ったほうがよほど説得に有利なのである。

「それから……私などが言うまでもないでしょうが、モンタゼリ師とモフタシャミ内務大臣にはじゅうぶんにご注意をお払いください。本来は国連特使が口を出すことではありませんが……」

言いながら、ルディアンは左手の擦り傷^すをなげた。

「……特使、その傷は？」

「実は、ここに来る途中に少し」

ルディアンは格闘を表すジェスチャーをした。

「なんと、それは……。お怪我は？」

国会議長は、息子ぐらいの歳の青年を見つめた。

「このかすり傷ひとつです」

ルディアンは笑った。

「モンタゼリ師と内相には、ずっと監視を付けています。だが、ホメイニ師^{イマム}の目もあります……議長は手を合わせて顎^{あご}をのせると、考え込んだ。このモンタゼリ師とモフタシャミ内相は、停戦に傾きつつあるイラン首脳部で、徹底抗戦を主張する代表格だった。停戦に対し、妨害工作を行う可能性は否定できない。すこしして、ラフサンジャニ議長は、話題をかえた。

「それから、イラクが問題です。イランの停戦

決議受諾を信じるかどうか」

「何なら、これから私が行ってきましようか」

ルディアンは気軽に言った。

「しかし、それでは……」

「デクエヤル国連事務総長からもお聞きになったでしょうが、私は今回、国連から任命されてこの役目をしていますが、非公式の仕事には慣れていません。その意味では、非常に身軽なのです」

「そうお願いできればどんなにか……」

ラフサンジャニ国会議長はルディアンの手を握った。

それから十分後には、ルディアンとサイドは国会議長らと挨拶をすませて、公邸を後にしていた。

☆☆☆

車で送らせよう、という議長の申し出を謝絶し、ルディアンたちは公邸を出ると、大通りで流しのタクシーを拾った。

「ホメイニ通りへ」

タクシーは十五分ほどして目的地に着いた。ルディアンは車から降りると北に折れる道に入った。

「情報部長は、テヘランに来たことがあるのですか？」

「ああ、初めてではない」

ルディアンはちらつと後ろを振り返ると、サイドを連れて急に荒っぽくあちこちの角をまがり、二〇分もしたころ、すつと角の建物に入った。そしてドアの呼び出しベルを、まるでコーランの唱和のような、ずいぶん妙な押し方をした。

「誰だ？」

「ルディアン・ライツ」

「ボス……！ 今、開けます」

「ハッサンはどうした？」

部屋に入るやいなや、ルディアンは聞いた。乱雑な部屋には、書類、無線機、ラジオなどが散乱している。スパイのアジトなんて、まあこんなものだ。

「連絡がありません。三時間前にあなたを空港に迎えに行ったきり」五十がらみのほお髭の男が、なまった英語で答えた。

「空港で襲われた。モンタゼリか内相の手の者だろう。例の写真は？」

「これです」

まだ二十歳そこそこの若い男が、皺しわの寄った封筒を手渡した。ルディアンがあげると、薄暗がりの庭で中年の目つきの鋭いごま塩頭の男が、片目の軍人風の男に書類を渡している写真が入っていた。

「この庭は、アブダビの家だな」

ルディアンが写真を見ながら言った。

「そうです」

若い男は、自分の手柄をボスに認めてもらおうと躍起になって言った。

「アブダビとは、あの『神の党』の……」思わずサイドが声をあげた。

「そうだ。人質事件などの一連のテロ活動の大元締めで、現在のイラン孤立化の大元だ。……この写真があれば、今のラフサンジャニ議長の政治力なら、内相を逮捕できるかもしれない」

「渡すんですか？」

サイドが聞いた。

「やむをえまい。国連特使の立場からは逸脱するが、時には道をふみはずさないとこの泥沼の戦争は終わらない」

ルディアンは写真を封筒にしまった。

「モンタゼリ師かと思ったが、内相のほうだったか。これをラフサンジャニ議長にわたしてくれ。それと引き続き内相の周辺監視も。……ああ、それから！ 今朝、内相の手の者が、空港の駐車場で死んだはずだ。そいつを調べてくれ」

「知つとります。色黒の、かぎ鼻の男でしょうか？ 内相の懐刀です。今日、左胸を撃たれたんですが、病院に運ばれて、一命をとりとめたそうです」

年配の男のほうの説明した。

「そうか……」

ルディアンは、言ったきり黙った。

まったく、この情報部長は、細身で女顔で童顔

で、とても世界を股にかける大物スパイ（この言い方をする、彼は鳥肌を立てて嫌がるが）とは思えない。みんなこの優しげな顔立ちにだまされるが、ソ連のゴルバチョフ書記長やミツテラン仏大統領なども直に丁々発止で押ししまえる太っ腹だった。三十歳になるかならぬかの歳でこの地位を築いたのだから、並みの経歴ではないのだろう。現に、今朝の襲撃にもこれっぽっちも動じていなかった。

「よし。ではこれから俺はイラクへ行く。連絡を入れるから、頼んだことを調べておいてくれ」

「はい、お気をつけて」

ルディアンとサイドはふたたびそのアジトを後にし、空港へと向かった。

☆☆☆

それから二人は、テヘラン空港からギリシャ行きの便に飛び乗り（国連パスポートの威力は強い。チェック・インは十分とかならなかった）、五時間後にアテネについた。ルディアンは、アテネ空港でE F F Oのプレジデント・デルフィートに電話をかけると、すぐさまイラク航空のバグダット行きに乗り込んだ。

飛行機の座席で英字新聞を広げ、ようやくつろいだようすのルディアンに、サイドは声をかけた。

「お疲れのところ、すみませんが……」

「何だ？」

「あの、我々の後ろの三列目の男……」

ルディアンは後ろも見ずに答えた。

「わかってる。気にするな」

「しかし……あれは味方ですか、それとも敵ですか？」

ルディアンはくすつと笑った。

「そういった概念は、とことんあてはまらないな、彼には」

「今朝、確かエツケールンと呼んでおられたようですが、もしやあれは……」

「いい記憶力だ。さすが元エジプト情報部員」

ルディアンは新聞をめくった。

「では、やはりクラウド・エツケールン……ヨロップでも最高ランクの狙撃手の……」

「そのかわり、仕事のえり好みが激しいことで有名だそうだな」

「ええ、それと……彼は、数年前レバノンに侵攻したイスラエルの軍事司令官を仕留めたことで、アラブでは英雄扱いされています」

「イスラエル軍による、パレスチナ人虐殺のときのこと？」

「そうです」

「……それは知らなかった」

ルディアンは新聞をたたんだ。

「さつきデルフィートに電話して、国連からイラクに連絡が行っているはずだ。化粧室で服装を整えておけ」

「はっ」

☆☆☆

バクダット空港には、イラク外務省の高官が迎えにきていた。

「遠いところをようこそ。ルディアン・ライツ 特使」

長身の高官は丁重に二人を迎え、リムジンに乗せた。バクダットは朝もやに光って美しかった。砲弾の跡があちこちに残り、どこか荒んでいたテヘランの街とは少し違っていった。

「大統領はただいま来客中ですが、あと三十分で終わる予定です。それまでここでおくつろぎください」

「お手数をかけます」

大統領官邸の豪華な内装の一室に通され、間もなく軽食が運ばれてきた。

「情報部長……、大統領とは、やはりサダム・フセイン……？」

「ほかにイラクの大統領がいるのか？」

ルディアンはナン（平たいパン）にバターをつけた。

「よくこんな急に、アポが取れましたね」

「それだけイラク側は停戦に必死なんだ。調停工作の国連の特使が最優先されても不思議はない」
ルディアンはナンを口にはおぼりながら言った。

サイドも空腹をおぼえたが、これから本当に戦争当事者のフセイン大統領と対面するかと思うと、食事などする気にならなかった。通訳を間違えたらどうしよう、と思うと急に不安がこみあげてきた。

「食べないのか？」

「情報部長こそ、よく平気ですな」

「食えるときに食つとかないと、いつまた食べるかわからん。俺たちの仕事の鉄則だ」

情報部長は空腹になると、言葉づかいが荒っぼくなる。皿の中身があらかたなくなったころ、大統領の来客が帰ったとの連絡があり、間もなくフセイン大統領みずから現れた。

「お待たせして申しわけない。サダム・フセインです」

「国連特使ルディアン・ライツです」

二人は握手すると腰かけた。

「大統領、単刀直入に申します。貴国の国連決議五九八号受託の意志に、お変わりはありませんね？」

フセイン大統領はルディアンの唐突な切り出し方に多少とまどつたが、すぐに返答した。

「それはもちろん。ライツ特使」

「イランがまもなく、停戦決議五九八号を受け入れます。ただし彼らは、それで貴国が戦闘を停止すると信じていないのです。その点を大統領に保証していただきたく、ここに参上しました」

「イランが……受諾を？ それはすこし……信じがたいですな」

フセイン大統領は国連特使が思ったよりずっと若輩だったせいも、丁寧な言い方にやや緩みが出てきた。ルディアンはほほ笑んだ。

「それはお信じにならなくても結構です。我々は貴国の停戦受託の意志を確認したい」

ルディアンは国連の権威をカサに、やや強気に

出た。大統領は少し考えたが、

「それは、もちろん……。ふむ、私が改めて決議受け入れの声明を出せば、それでよろしいのかな」

と言った。

「ええ。政府として公式のものなら」

「承知した。時期はいつごろ」

「早ければ早いほど」

「では、本日のバース党政権樹立二〇周年演説の中で、改めて停戦に対する我々の決意を述べることにしよう」

今日、というのを聞いてルディアンは驚きの表情を見せたが、

「それは……非常に幸いなことです」

と述べた。ちょうどそのときドアをノックして、大統領の秘書官らしい男が入ってきた。

「お話中、申し訳ありません。ルディアン・ライツ特使に、デルフイート様より緊急の電話が入っております。重要なことだと」

ルディアンは一瞬、考えた。

「わかりました。では大統領、私はこれで失礼いたします」

ルディアンは別れの挨拶もそこそこに、案内された電話に飛びついた。

「ルディアン、かなりやばいぞ。例の男は、オパールを仕掛けている。それもここ数日のことだ」

受話器からは、デルフイートの抑制した声が流れてきた。

「オパール」とは、クーデター計画の隠語だった。今のイランではホメイニ師を倒すのは馬鹿げており、倒す相手はラフサンジャニ国会議長を指していた。ラフサンジャニに何かあれば、停戦がさらに遠のくだけでなく、イランの政局が混乱し、ただでさえ泥沼の中東情勢がさらに手を付けられなくなるのは火を見るより明らかだった。

「わかった。今、フセイン大統領が停戦受託の再確認する声明を今日、発表すると約束した。向こうにも一刻も早く公表するように言ってくれ」

「OK」

デルファイトは短く言い、電話は切れた。

大統領官邸を出ると、ルディアンはただちにバクダットのE F F O支部に連絡を取った。

「できるだけ早くここからテヘランに行く方法は？ できればイラク側には感づかれたくはない」

「は……バクダットーテヘラン直行便は、現在、飛んでいません。アテネかニューデリーをいったん、経由するか……」

「臨時便でもヘリでもいい。とにかく一刻も早く行きたい」

「わかりました。ただちに手配してみます」

バクダットの部員は中東にあるまじき迅速さで駆け回った。

ルディアンとサイドは空港へ先回りし、連絡を待った。かなり待った後、電話があった。

「P L O（パレスチナ解放機構）が小型ジェットを貸してくれるそうです。今からパイロットがそちらに向かいます」

「……よくやった。感謝する」

電話が切れてまもなく、P L Oのパイロットが来た。札を言おうとして近づいたルディアンは、パイロットの連れの男を見て一瞬、身体を硬直させた。

「……君がなぜ」

「一刻が惜しいんだろ。話は乗ってからにしろ」
エッケレンが言った。ルディアンは一瞬、その場から逃げようとさえたが、思いなおし、黙ってパイロットの案内するままにビジネスジェット機に乗り込んだ。

「ずいぶん、いい飛行機だな」

ルディアンがそっけなく言った。

「アラファトの自家用機だからな」

エッケレンもまた、そっけなく言った。サイドはその瞬間、げつと叫びそうになった。何しろこの一両日でラフサンジャニ、フセインの二大首脳と会ったばかりだというのに、今度はP L Oのアラファト議長とは。サイドの頭はほとんどパニックに陥っていた。

「それでなぜ、君がここにいるんだ」

「おまえがいるからさ」

エッケレンがドイツ語で答えた。

飛行機のなかに、一瞬沈黙がおおった。その冷たい空気を無視して、ルディアンが聞いた。

「アラファトと、どういう関係なんだ」

「昔なじみ」

「わかるように説明してくれ」

ルディアンは開き直ったのか、ぞんざいな口ぶりで尋ねた。

「仕事の依頼を受けたのがきっかけで親しくなった。一時期、レバノンでP L Oとともに活動したこともある。それから、最近のアラファトはバクダットを根城にしているんだ。おまえに空港でまかれた後、仕方がないから、挨拶しにP L Oのところへ行った」

空港ではルディアンとサイドは国連パスポートだったので、一般よりだいぶ早く外に出ることができたのだった。

「それで何と言ってここへ来たんだ」

「俺の恋人の危機だから力を貸してくれとね。これでおまえと俺の噂はP L Oでも広まったぞ」

「エッケレン！」

ルディアンは声を荒立てた。

「いいかげんにしろ！ あちこちでくだらない噂を広めやがって」

「名誉うんぬんにこだわるおまえじゃないだろう？」

エッケレンは、怒るルディアンをあくまで楽しそうに相手している。

「僕の名誉なんかどうでもいい。だが僕がE F F Oの幹部である以上、E F F Oの名誉がかかっているんだ。これ以上、根も葉もない噂を広めるなら、こちらにも考えがあるぞ」

「根も葉もない？」

エッケレンは自信たっぷりにルディアンの手の甲に触れた。ルディアンはさっと手を退かせた。

「あと二〇分でテヘランです。メヘラバード空港でいいんですね？」

前触れもなく、パイロットが声をかけた。

「ああ、頼む」

ルディアンは努めて平静にこたえた。そしてパイロットに無線を借りると、昨日行ったアジトに連絡して、空港に車を寄こすよう言った。

空港に着くとあたり中、イランの停戦決議受諾の噂がとびかい、騒然としていた。パイロットに礼を述べたルディアンは、エックレーンが当然のように二人についてきても何も言わなかった。駐車場に、アジトにいた若い方の男が迎えに来ていた。

「国会議長公邸だ。急げ」

ルディアンは乗りこむとすぐ命じた。

議長公邸付近には検問ができていた。停戦を聞いてお祭り騒ぎを始めた市民と、停戦に反対する市民の衝突を避けるためだという。

「妙な予感がする。いいから突破しろ」

ルディアンは命じ、車は検問を突破した。後ろから警備兵が追いかけてくる。公邸に近づくにつれ追手は過激化し、ついには銃弾が飛んできた。

「威嚇射撃しておけよ、エックレーン」

車に積み込まれていたライフルを持ち出したエックレーンに、ルディアンが言った。

「ボス、あれは……」

運転手が声を上げた。議長公邸の一角に大型のバンがつつこみ、火の手が上がっていた。

公邸からばらばらと人が逃げ出してくる。

「右へ回り込め！」

ルディアンが叫び、ラフサンジャニ議長が秘書官とともに走り出してきたところへ、車を止まらせた。

「乗ってください！」

ルディアン顔を見た議長はとっさに判断して乗りこんだ。後ろから銃声。

「これは一体……」

ルディアンが聞いた。

「公邸に突然、爆薬を積んだ車がつっ込んで来たのです」

ラフサンジャニ議長は息をついた。太った身体は全力疾走に慣れていないらしく、ぜいぜいと息を吐いている。

「では、あの検問は……」

「検問？」

秘書官が聞いた。

「ご存知ないのですが。やはりあれは内相の……突っ込んできた車も、検問の兵士も……」サイードが叫んだ。ルディアンが聞いた。

「クーデターのことはお聞きになりましたか」

「ええ、そのあとすぐに裏付けを取らせましたので。それで、モフタシャミ内相を拘束しようとした矢先に……」

ラフサンジャニ議長の言葉は、銃声によってさえぎられた。

警備兵たちはもはやばかりもなく、この車に銃弾を浴びせていた。ルディアン、サイード、エックレーンが応戦する。

「このままでは、議長の命に関わります」

「ど、どこへ逃げれば……」

「ホメイニ師のところがいい」

ルディアンは、驚く議長に澄んだ瞳で言った。「近くの軍事基地からヘリを呼んで、内相らの確保が終わるまで、イマムのところを潜んでいてください」

「わ、わかった」

そうしている間も、銃撃戦とカーレースが続いている。

秘書官が車の無線で軍事基地を呼び出し、ヘリと救援を呼んだ。まもなく軍用ヘリの音が聞こえてきた。議長と秘書官が乗りこみ、急いで飛び立つ。

いったん引き離れた追手が、ヘリの音を聞きつけて集まってきた。エックレーンが上昇中のヘリを援護射撃する。

「情報部長、あれ……」

サイードが叫ぶと同時に、ルディアン・ライツはエックレーンに照準を合わせていた警備兵の眉間を打ち抜いた。テヘラン郊外の灌木地帯に、銃声が響き渡った。

議長を乗せたヘリは、もはや射程距離からはずれていた。そのころようやく、軍地基地から助けが到着し出し、追手はそれを見て逃げ出した。軍

用車の群れがそれを追う。

逃げていく追手になおも銃口を向けるエツケーレンの肩に、ルディアンは手をおいた。ルディアンのとがめるような目つきに、エツケーレンは銃を肩から降ろした。そしてあいた手でルディアンの肩をすっぽりつつみ、もう一方の手で顎をかむと、唐突にキスした。

ルディアンは今度は抵抗しなかった。

サイドと運転手は、遠ざかる銃声を聞きながら、ぼーっと二人のラブ・シーンを見つめ続けていた。

☆☆☆

その夜八時半、ラフサンジャニ国会議長はテレビカメラの前で記者会見し、停戦に至るまでの経過についてイラン国民と世界に対し説明を行った。いわく、イラクの化学兵器とアメリカによる民間機撃墜のような事態をこれ以上続かせないため、国連決議五九八号を受け入れることを決定し、これはホメイニ師の承認を得ていると。

この知らせを聞いて、イラン中でお祭り騒ぎが始まっていた。みな、半信半疑ではあったものの、長く続いた苦しい戦争が終わるといふニュースを喜びをもって迎えていた。

その二時間半前、ラフサンジャニ議長を襲った一団は残らず拘束・逮捕または射殺された。そして首謀者の内相の配下の主だった者もあらかじめ逮捕され、内相自身は政治的配慮で逮捕を免れたものの、彼は事実上失脚した。残った者も雲隠れした。

その知らせを受けたラフサンジャニ議長はホメイニ師の住居から公邸にもどり、テレビでの記者会見を準備させたのである。

ラフサンジャニ議長がフラッシュを浴びながら記者たちの質問に答えていたころ、ルディアン・ライツとクラウド・エツケーレンはフェルドウシ通りから一本入った路地で向かい合っていた。遠くに停戦決議受諾を祝う歓声が響いている。

最初に口を開いたのは、ルディアンだった。

「まず、君には感謝しなければならない。君の力がなければ、あの歓声はなかったかもしれない」

「自分の命の礼を言うのが先じゃないのか？」

エツケーレンはやや不満そうだった。

「命よりこっちが大切なのでね。命を助けてくれたことにも感謝している」

七月とはいえ、高原にあるテヘランは日が暮れると肌寒さがます。やや風も出てきた。

ルディアンは目をふせたまま言葉を続けた。

「——こういう友人同士ならなってもいい。なかなか理想的だ」

「俺は、おまえのすべてが欲しい」

「……その答えなら前に言った」

「おまえは必ず、違う答えを言いに来るだろう」
エツケーレンはいつものまにかルディアンを壁際に追いつめ、少し長めの黒髪に触れていた。ルディアンはさっと身をひるがえす。

「だいたい、その自信はどこから来るんだ。僕が実は君を嫌っているとは思わないのか」

「そんなもの、身体に触ってみればわかる」

エツケーレンはルディアンの肩をつかんだ。ルディアンはそれを振りほどく。

「力まかせで迫っているくせに」

「愛している」

「——エツケーレン……それは僕の気持云々の問題じゃないんだ。僕にはE F F Oもデルフィートも捨てられない」

「どちらも取ればいいだろう。おまえが捨てるのは、デルフィートへの片恋慕だけだ」

エツケーレンはルディアンに覆いかぶさった。

「これ以上、デルフィートに恋慕しつづけてどうなる？ おまえの理屈じゃ、俺以上にどうにもならない相手だぞ」

「違う、デルフィートにそんな感情はもっていない」

「俺にはそうとしか思えんぞ。だいたい、これは何だ」

エツケーレンはどくどくと激しく脈打つルデ

イアンの手首をつかみ、ルディアンの目を射ぬいた。野生の獣のような茶色の瞳。

ルディアンは目をそむけた。

「……やめろよ。僕だって生身の人間なんだ」
「知っている」

ルディアンはエツケーレンを睨みつけた。

透明感のある緑の瞳が複雑な敵意にあふれるのを見て、エツケーレンは背中にぞくぞくするほど快感を覚えていた。

ルディアンは睨みつけたまま、きびすをかえして歩き出した。数歩あるいたところで、いきなり背後から襲われ、首をねじむけられると、唇を奪われた。

ルディアンの身体の一番やわらかなところに堅く巻きついたエツケーレンの腕は、必死にもがいてもはずれない。エツケーレンはかまわず、唇へ頬へうなじへ首へと舌をはわす。

エツケーレンがルディアンの向きを変えようとしてわずかに手の力をゆるめた瞬間、ルディアンは思い切りひじをエツケーレンの胃に打ち込んだ。

そしてエツケーレンの手が離れると、いちもくさんに人通りのある方へと走り去っていった。

☆☆☆

停戦決議受諾の発表の翌日、ルディアンとサイドは報告のため、パリのE F F O本部へもどった。本部に入ると花が飾られ、みな、二人の働きをほめそやした。

普段は一般職員の入れない最上階に、サイドもついていた。

デルフィートは、笑みを浮かべルディアンを、そしてサイドの肩を抱き、労をねぎらった。サイドが先に部屋を出たとき、二人は楽しそうに歓談していた。

「デクエヤル事務総長がおまえのことを感嘆していたぞ。目的に達する手際は、まことに鮮やかだったと。それから、今回の報告のなかでおまえの名前を出したがっていた」

「無理だよ、デルフィート。むこうじゃ銃撃10戦や、内政干渉まがいの情報提供をしていたんだ。その実態がバレれば、もう国連から仕事は来ないだろうね」

「本当に出さなくていいのか？」

デルフィートは、多少不服だった。ルディアンが危険を冒して得た成果を、十二分に獲得すべきだと考えたのである。だが、そんなデルフィートの心中を知ってか知らずか、ルディアンはあっさり言った。

「いいじゃないか、僕の名前が出なくても。とにかく戦争は終わるんだから」

光の射しこむ高層ビルの最上階で、デルフィートは観葉植物の間をぬって窓に近づいた。

「ルディアン……おまえ、俺に何か言うことはないのか？」

「え？」

「……エツケーレンのことだ。パリから連れていっただろう」

「それは違う。彼とは偶然同じ飛行機に乗り合わせたんだ」

「くだらん言い訳はするな！」

デルフィートは一括した。

「……偶然ではないかもしれない。だが、僕に偶然だったし、彼に感謝はしたが、媚はしなかった」

「見損なったぞルディアン！ エツケーレンと付き合っているなら、そうと言えばすむことだ」

「違う、デルフィート、僕は彼とはそんな関係じゃない」

「じゃあ、なんだ？ おまえは偶然通りかかったエツケーレンをたらしこんで、今回の任務を完了したのか？」

「デルフィート……」

言ったきり、ルディアンは絶句した。沈黙は数分間、続いた。

誰かがドアをノックした。

「プレジ、お客様がお見えです」

東洋系の職員がデルフィートを呼んだ。

「今いく」

デルフイートはルディアンの方を振り向いた。

「首のキスマークをなんとかするまで、人前には出るな」

デルフイートはそう言うと、部屋を出ていった。

「あ、情報部長、おめでとうございます。これで一つ紛争が……」

いれ違いに入ってきた職員は言いかけてやめた。ルディアンはひどく気落ちした顔で青ざめていた。

「どうかしましたか？」

「……いや、疲れただけだ。少し休む」

ルディアンは部下の肩をぼんと叩くと、自分の部屋へと姿を消した。

☆ ☆ ☆

一九八八年七月一日、イランの停戦決議受諾発表につづき二十三日後の八月二十日、国連軍監視のもと停戦は実施された。八年間におよぶイラン・イラク戦争は、ここに事実上の終結を見たのである。

(終わり)